

【2024 年度共同研究費 成果(経過)報告書】

地域在住女性高齢者における骨粗鬆症性椎体骨折の受傷状況とその対応

加藤貴子^{*,1)}、富永亨²⁾、山田紀代美¹⁾

¹⁾ 聖隷クリストファー大学、²⁾ 聖隷三方原病院

【目的】本研究の目的は、地域在住女性高齢者における骨粗鬆症性椎体骨折の受傷状況とその対応を明らかにすることである。

【方法】整形外科外来で椎体骨折と確定診断を受けた 60 歳以上の地域在住高齢者のうち本研究に同意が得られた 14 名を対象に、これまでの椎体骨折の状況（各時期、場面、痛みの種類と部位、その他気になる症状、受傷の受け止め方）と、その対応（受診の有無と受診に至った理由など）のインタビューを行った。内容は対象者の許可を得て IC レコーダーに録音し質的帰納的分析を行った。調査期間は 2024 年 4 月～2025 年 3 月であった。

【結果】

1. 対象者および椎体骨折の状況：14 名の対象者の属性は全員女性であり、年齢は 71 歳から 92 歳で平均年齢 83.9 歳であった。椎体骨折数は、一カ所 10 名、複数カ所 4 名であった。骨折部位は、第 1 腰椎～第 3 腰椎が各 4 名（19.0%）、第 4 腰椎が 3 名（14.3%）、第 12 胸椎が 2 名（9.5%）、第 7・第 8・第 11 胸椎、第 5 腰椎が各 1 名（4.8%）であった。

2. 受診に至った椎体骨折の受傷状況とその対応：椎体骨折の受傷要因は、立った高さからの転倒に加え、重い物を持つまたは、持ち上げようとする、体の向きを変える際に他の物に腰部をぶつけるなど軽微な外力が椎体に加わっていた。一方 7 名の対象者が、「骨は折れていない」、「いつ骨折したかわからない」や「自然に骨折をした」という認識であり要因の特定は不確かであった。また、受傷初期には、腰部への違和感や軽度の痛みがあり、自宅安静や整体にいくなどの対応をしていた。その後、痛みの増強と共に生活が困難になってくることで医療機関へ受診する選択をし、その期間は、3 日から数十日を要していた。

なお、医療機関へ受診をしていない椎体骨折（形態骨折）があったと推測される者は 3 名であった。これら 3 名は、日常生活の中で腰痛や職業性に伴う腰部の違和感を自覚していたが、骨折に伴う強い痛みやそれに付随する自覚症状はなく受診には至っていなかった。

【考察】骨粗鬆症性椎体骨折は、骨折の要因と思われるエピソードや自覚症状が不確かであることが、医療機関への受診の遅れを助長し、早期治療に至らないことが予測される。また、これまで高齢者が培ってきた骨折の知識と相違していることや、本人も気づかない椎体骨折（形態骨折）は、違和感があるものの自覚症状が乏しく医療機関への受診には至らない。これらより、今後の二次性骨折を引き起こしやすいと考える。

【謝辞】本研究に快くご協力くださいました研究対象者の皆様に敬意を表し、心より感謝を申し上げます。また、研究の遂行に際し多大なるご支援とご協力を頂きました常葉大学リハビリテーション病院副院長天野麻美先生に謹んでお礼を申し上げます。

倫理審査	■承認番号（23030-02、24034） □該当しない
利益相反	■なし □あり（ ）